ブリーフ・レジリエンス尺度日本語版 (BRS-J) の開発

○徳吉陽河¹・森谷満²(¹ 東北大学大学院 ² 北海道医療大学)

キーワード: レジリエンス, 尺度開発, 項目反応理論

Development and validation of the Brief Resilience Scale Japanese version (BRS-J)

Yoga TOKUYOSHI¹, Mitsuru MORIYA²(¹ Tohoku University ² Health Sciences University of Hokkaido)

Key words: Resilience, Scale development, Item Response Theory

目 的

レジリエンス(Resilience)という言葉は, 行動科学や健康の領域で注目を集めてきた。レジリエンスは, 精神的回復力, 弾力性, 逆境力, 耐久力などと訳されているが, 概念は一樣ではなかった。その中で, Smith et al. (2008)は, レジリエンスにおける本来の意味とされる概念に基づいて The Brief Resilience Scale を開発した。

レジリエンス(Resilience)の語源は, *resile* であり, 困難な出来事に対する立ち直りに関わるとされている (*re*: 再び, *+ bounce* や *spring back*: 跳ね返り)。その背景から, レジリエンスは“ストレスからの立ち直り”を意味するようになった。BRS は, そのレジリエンスを測定するための簡易的な尺度として開発された (Smith et al., 2008)。そこで, BRS は, 我が国で利用が可能であるか検討する。そのため, 原著者より BRS の翻訳権を取得し, その日本語版の開発を行う。つまり, 本研究の目的は, BRS 日本語版 (BRS-J) の開発を行い, その信頼性及び妥当性の検証を行う。

方 法

調査参加者: 調査 1: 814 名 (男性 407 名, 女性 407 名), 平均年齢 30.6 (*SD*=9.9)。調査 2: 219 名 (男性 81 名, 女性 148 名), 平均年齢 31.8 (*SD*=11.2)。調査 3: 300 名 (男性 100 名, 女性 200 名), 平均年齢 29.5 (*SD*=10.0)。すべて, WEB 調査で実施した。使用尺度: 尺度の構成は, BRS-J 及び, 調査 1: TAC-24 (神村ら, 1995)。調査 2: PGIS-II 日本語版 (徳吉・岩崎, 2014), 人生に対する満足尺度 (SWLS) 日本語版 (角野, 1995)。調査 3: Ego-Resiliency 尺度日本語版 (畑, 小野寺, 2013)。

結 果

探索的因子分析と基本統計量 調査 1 (*N*=814) において, 平行分析 (固定値 1.0 を基準) を実施した。その結果, 1 因子構造が妥当と示された。BRS-J の合計における平均値 15.9 (*SD*=5.8) であった。*t* 検定を実施したところ, BRS-J の合計について性差は確認されなかった。BRS-J の 6 項目について, 1 因子構造を想定した最尤法 (Promax 回転) に基づく探索的因子分析を行った。その結果, BRS-J の因子負荷量は, .53 以上であった。BRS-J の信頼性係数である α 係数は .86 であり, ω 係数は .87 であった。さらに, BRS-J の項目分析 (平均値 $\pm 1SD$) を行なったところ, 天井効果, 床効果を示す項目は確認されなかった。因子分析の構造および信頼性係数の値からみて, BRS-J は利用が可能であることが示唆された。

確認的因子分析 さらに, 調査 1 (*N*=814) において, 最尤法に基づく確認的因子分析を行ったところ, 適合度は CFI=.97, TLI=.95, RMSEA=.095 であった。

項目反応理論 調査 1 (*N*=814) において, 項目反応理論 (IRT) による分析を行ったところ, BRS-J の各項目の識別力 (*a*) は, 1.25 以上であった。また, 全体のテスト情報量は 41.1 であった。さらに, ノンパラメトリック項目反応理論 (NIRT) である Mokken Scaling Analysis を行なったところ, BRS-J の各項目における *H*i 係数は .43 以上であった。また, BRS-J における項目全体の *H*t 係数は .55 であり, 尺度項目として強い尺度であることが分かった (Table 1)。

相関分析 妥当性の検証 妥当性の検証のため, 調査 1 から 3 のデータを利用して, BRS-J と TAC-24, PGIS-II 日本語版, 人生に対する満足尺度日本語版, Ego-Resiliency 尺度日本語版との

間で相関分析を行った (Table 2)。

考 察

因子分析, 信頼性分析および IRT による結果から, BRS-J は, 尺度として利用できることが確認された。BRS-J の妥当性の分析において, BRS-J は, TAC-24 の肯定的解釈, PGIS-II 日本語版の合計, 積極的な行動, 変化への準備, 計画性, 人生に対する満足尺度日本語版, Ego-Resiliency 尺度日本語版との間で正の相関が認められた。つまり, BRS-J は, 肯定的な認知や積極的な行動に関与することが示唆された。

Table 1 BRS-J (調査 1) 因子負荷量, 識別性, *H*i 係数

	Q1	Q2R	Q3	Q4R	Q5	Q6R
<i>F</i>	.78	.73	.85	.73	.69	.53
<i>Dis</i>	2.7	2.5	3.6	2.3	1.9	1.3
<i>H</i> i	.56	.57	.61	.57	.54	.43

注. *R* は, 逆転項目, *F*: 因子負荷量, *Dis*: IRT の識別性, *H*i: NIRT の項目ごとの *H* 係数。BRS-J の α 係数は .86, *H*t 係数は .55 であった。BRS-J の合計の平均値 15.9 (*SD*=5.8)。

Table 2 BRS-J と他の尺度との相関分析 (調査 1 から 3)

PGIS-II 日本語版 (<i>N</i> =219)	BRS-J	TAC-24 (<i>N</i> =814)	BRS-J
PGIS-II の合計	.50	気晴らし	.28
積極的な行動	.49	回避的思考	.22
変化への準備	.46	責任転嫁	-.18
計画性	.45	放棄・諦め	-.19
資源の活用	.22	肯定的解釈	.53
SWLS 日本語版 (<i>N</i> =219)		情報収集	.25
人生に対する満足尺度	.51	計画立案	.25
Ego-Resiliency 尺度 日本語版 (<i>N</i> =300)	.57	カタルシス	.07

注. カタルシスを除いて, すべて有意 ($p<.05$)。相関係数が .30 以上は太字。

引用文献

- 神村 栄一・海老原 由香・佐藤 健二・戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究 33, 41-47.
- 畑 潮, 小野寺 敦子 (2013). Ego-Resiliency 尺度 (ER89) 日本語版作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究 22(1), 37-47.
- Smith, B., Dalen, J., Wiggins, K., Tooley, E., Christopher, P., & Bernard, J. (2008). The brief resilience scale: assessing the ability to bounce back. *International Journal of Behavioral Medicine*, 15(3), 194-200.
- 角野 善司 (1994). 人生に対する満足尺度 The Satisfaction with Life Scale (SWLS) 日本語版制作の試み 日本心理学会第 58 回大会発表論文集 pp.192.
- 徳吉 陽河・岩崎 祥一 (2014). 自己成長主導性尺度 II (PGIS-II) 日本語版の開発と心理的測定 心理学研究, 85(2), 178-187.